

下記は平成26年5月16日に札幌地裁に提出された

B型肝炎訴訟の意見陳述書の抜粋になります。

1 長男は、昨年(平成25年)9月2日、肝細胞ガンのため、入院後わずか1週間にして、43歳の若さで亡くなりました。

長男は、会社員であり、毎年、社内での健康診断は受診していたようですが、肝機能の数値には異常がなく、B型肝炎ウイルスの検査自体も一度も行っていませんでした。

私は、平成16年12月にB型肝炎を発症したこともあり、2人の息子には一度検査を受けるようにと何度か話をしていました。

もっとも、私自身、B型肝炎発症後も比較的普通の生活を送っていましたので、長男としては、B型肝炎はそれほど深刻な病気であるとの認識がなく、検査を受けるまでのことはないと思っていたのかもしれませんが、今となっては、長男がどのように考えていたのか知るすべはありません。

長男は、東京において、妻と2人で生活をしており、年に2回ほど妻と共に帰省をしては、私達夫婦と一緒に旅行をしたり、北海道のグルメを楽しんでいました。

長男夫婦とは昨年の2月に紋別市へ流氷を見に行きましたが、今思うとこれが長男との最後の旅行となってしまいました。

2 長男は、昨年6月27日、腰に痛みが出るようになったことから、自宅近くの整形外科病院に受診をしました。

この整形外科病院では、「腰椎椎間板ヘルニア」との診断を受けたものの、症状が改善しないことから、7月6日、別の整形外科病院を受診したところ、「腰椎間板ヘルニア、左坐骨神経痛」と診断されました。

そのため、長男は、この整形外科病院に定期的に通院をし、神経ブロック注射や投薬などの治療を受けていました。

しかしながら、長男は、この整形外科病院での治療によっても腰の痛みが良くならず、むしろ、会社に出勤することもできないほどの強い痛みが出るようになったことから、整形外科が充実している東京都内の総合病院を紹介されました。

そこで、長男は、8月27日、この総合病院に受診をしたところ、腰椎MRI検査で悪性腫瘍の骨転移が疑われ、即日入院となりました。

3 私は、昨年7月中旬ころ、長男に腰の痛みのあることを聞いてはいましたが、整形外科に通院をしているということでしたので、まさか肝細胞ガンであるなどとは思っていませんでした。

長男と妻とは、8月28日午後8時ころ、担当の医師から、B型肝炎ウイルスを原因とする肝細胞ガンであることや、病状としてもかなり厳しい状態にあることなどの説明を受けました。

この際、長男は、はじめて自分がB型肝炎ウイルスに感染していることを知りました。

長男の妻から、私に対し、長男の病状を知らせる連絡があったものの、私としては、あまりにも突然のことであり、ただただ驚くばかりであり、頭の中は真白となってしまい、いずれにしても長男の元に行かねばならないということで、翌8月29日、長男が入院をする東京都内の総合病院へ夫と共に駆けつけました。

長男の元に駆けつけたところ、長男は、病室で点滴を受けており、目や手足に黄疸が出ていましたが、私達に対して、「遠いところどうもありがとう。すみませんね。」「こんな病気になってしまったけど、心配しないでね。」などと、苦しそうな様子はなく普通に話かけてきました。

もっとも、今考えると、長男は、私達に心配を掛けまいと、できる限り元気な姿を装っていたのだらうと思います。

また、長男は、私に対し、「黄疸はひどいかな。」と尋ねてきたので、私は、「大丈夫だよ。たいしたことないよ。」と答えると、安心した様子でした。

この会話の最中、長男は、妻に対し、何度も「ごめんね。ごめんね。」と言っていました。これは、自分がこのような重い病気にかかってしまったことを気にして詫びていたのだと思います。

この日の夜、私と夫とは、担当の医師から、長男の病状について直接説明を受けましたが、この説明によると、長男には肝細胞ガンのほか、肺や左仙骨にもガンが転移している状態であり、ガンに対する根本的な治療はできず、余命についても「何ヶ月という段階ではなく、1日1日のレベルである。」とのことでした。

この日以降、私と夫は東京にとどまり、毎日、長男の病室を訪れ、夜まで一緒にいるようにし、長男の妻も病院の許可を得て病院に泊まり込むようになりました。

翌8月30日、長男は、前日に私達とおしゃべりをしすぎたせいか、疲れている様子が見受けられ、また、腰の痛みも相当つらい様子でした。

黄疸については、私の目には前日とほとんど変わらないように見えたのですが、看護師の方によると、前日より黄疸が強く出ているとのことでした。

その翌日である8月31日には次男夫婦も上京し、長男の病室を訪問しました。

長男は、痛みを和らげるため、モルヒネの量を増量してもらっており、一日の大半を寝て過ごしている状態でした。

9月1日、これまで長男の左足のみにあったむくみが右足にも見られるようになり、長男は、前日と同様、ほとんど眠っているという状態でした。

長男が「足がだるい。」と言うので、交代で足をさすってあげたところ、気持ちよさそうな様子をしていました。

この日の夜、私、夫、次男、次女の妻が病室を出る際に、私は、長男に対し、「明日またね。元気でね。」と声を掛けたところ、長男は、私に対し、「うん。ありがとう。」と答えていました。

9月2日、この日は、長男が入院中である総合病院の手配により、肝臓ガンの治療例が豊富な別の病院で診察を受けるための予約をしていました。しかしながら、長男は、午前5時30分に突然ショック状態となりました。

すぐに長男の妻から私の元に電話があり、私や夫のほか次男夫婦も長男の元に駆けつけましたが、午前7時には呼吸停止となり、気管挿管が行われましたが、午前9時50分には呼吸が止まり、そのまま長男は亡くなりました。

長男は、平成25年8月27日にB型肝炎ウイルスに感染していることや肝細胞ガンであることを初めて知り、そのわずか6日後にこの世を去ることになってしまいました。

4 長男は、小学校から高校まで1日も休むことなく通学しており、健康には自信を持っていました。

また、長男は、結婚生活9年目で仕事も順調であり、まだまだ沢山やり残した事があったかと思うと、本人自身が無念でならなかったと思います。

私がB型肝炎ウイルスに感染していたことが原因であると思うと、長男や長男の妻には本当に申し訳なく、未だに長男の死を受け入れることはできていません。

我が子を先に看取らねばならないということは、自分の命を取られるより遙かに辛い経験でした。

上記の意見陳述書には肝炎問題の様々な要点が集約されていると思います。

1 母親など、強い関係の方からの勧めであっても肝炎検査というものは受診されない事。

- 2 本人に自覚症状があったが、肝臓の異変を腰痛と判断し、整形外科を受診した事。
- 3 整形外科医がヘルニアと診断し改善が見られず、別の整形外科医もヘルニアの診断をした為に肝炎の治療が遅れてしまった事。
- 4 家族などに心配を掛けたくない、相当の自覚症状がでるまで、本人が我慢してしまう事。

以上の事を踏まえて、30代40代の肝炎発症者が、治療を受ける事無くなくなってしまう様、更なる対応をお願い致します。